

監督 瀧田康弘 『クワイ河に虹をかけた男』
撮影 山田寛
音楽 須江麻友
MA 木村信博
EED 吉永順平
CG 斎藤未度加 南真咲 渡辺恵子 小林道子
通訳 スチュアート・ウォルトン 清水健

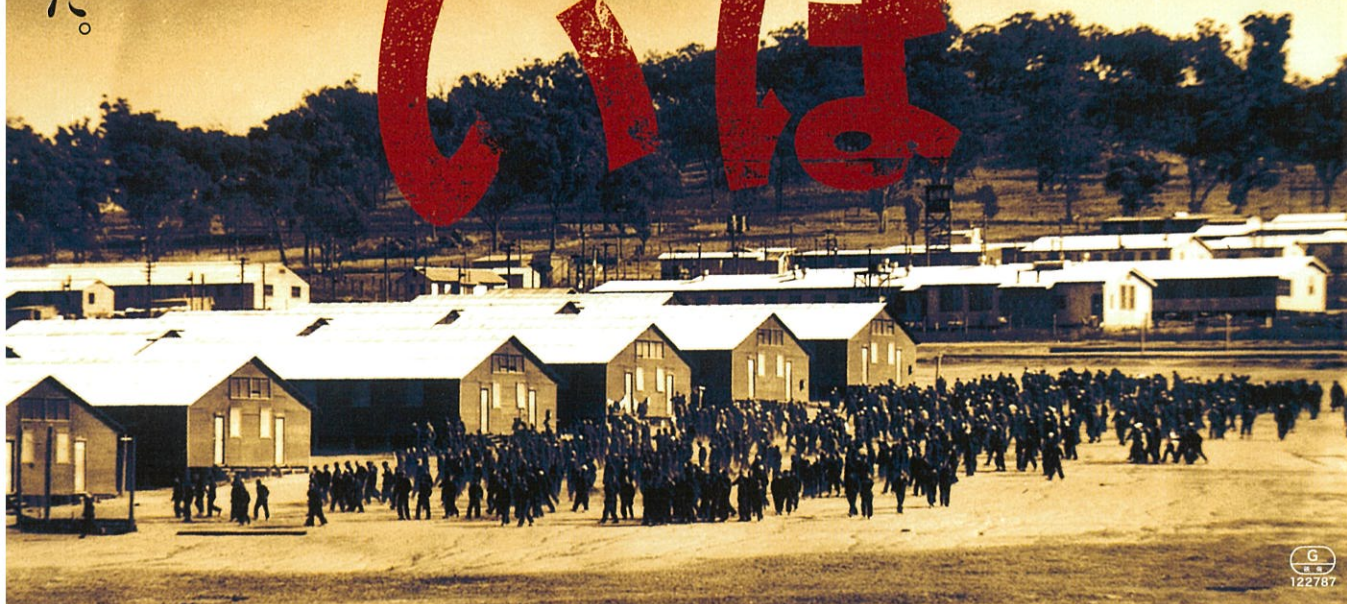
協力 国立療養所邑久光明園 山陽学園
Theater company RINKOGUN 機光群 坂手洋一
山田真美 田村恵子 カウラ事件70周年記念行事実行委員会
資料提供 オーストラリア戦争記念館 国立駿河療養所
製作 瀬戸内海放送
配給 太秦
2021 日本 DCP カラー 96分
©瀬戸内海放送

「瀬戸内海放送発ドキュメンタリー映画第2弾」

カウラは 忘れ ない

“生きたい”

捕虜の汚名にあらがいがいながら、彼らはそう願った。



G
122787



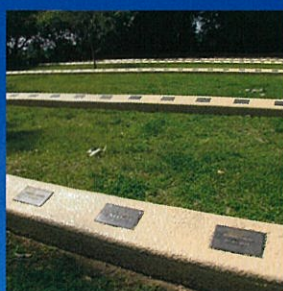
www.ksb.co.jp/cowra/

オーストラリアで起こった日本人捕虜集団脱走 知られざる“カウラ事件”の真実— それは生きるためか、死ぬためか



INTRODUCTION 何故、カウラ事件が起きたのか？

太平洋戦争中の1944年8月5日、オーストラリア東部の田舎町カウラにあった第十二捕虜収容所で近代戦史上最大といわれ、1104人に及ぶ集団捕虜脱走事件が起こった。日本人捕虜234人、オーストラリア人の監視兵ら4人が命を落とした。「カウラ事件」である。正確に言えば「脱走」ではなく、日本人捕虜の目的は「死に行く」ことだった。当時の日本軍人、そして民間人の精神をも支配していた「戦陣訓」の「捕虜を恥」とする教義がその背景にはあった。一方、収容所で手厚い保護を受けた生活を送るうち、捕虜たちの間には生への執着が確実に芽生えていた。「生きたい、生き永らえたい」事件の生存者は正直な心情を吐露する。だが、その思いはある捕虜の「貴様らそれでも帝国軍人か!」というひとりでかき消されてしまった。同じ状況に置かれたとき、私たちは大きな声に抗うことができるのか？ 生存者たちに今なお残る悔恨、その思いを受け止めようとする若者や演劇人、事件を教訓に和解への道を歩んできたカウラの人々——。本作は『クワイ河に虹をかけた男』の満田康弘監督が、ライフワークともいえる「カウラ事件」の深層に挑んだ渾身の第2作である。この事件がコロナの時代に生きる私たちに問いかけるものは何か。



STORY

オーストラリア側の捕虜の待遇は、日本軍とは違い申し分なかった。食事はあり余るほどで、捕虜たちは麻雀や花札、演劇など様々な娯楽を楽しんでおり、中でも大きな楽しみの一つが野球だった。手製のバットやグローブを器用に作り、班対抗の試合なども行われていた。捕虜の間に階級の序列はなく、重要事項は全員の投票を経て42の班の代表からなる班長会議に諮られ、決定していた。形式的には民主的な秩序が成立していたのだ。しかし、そんな安穏な日々の中でも捕虜たちの頭を絶えず離れないことがあった。戦陣訓の一節「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪過の汚名を残すこと勿れ」である。多くの軍人は、捕虜の汚名を恥じ、日本にいる家族や友人に害が及ぶことを恐れ実名を伏せていた。絶望的な集団脱走を決定するか否か、生への希望にあらがいがながら、捕虜たちは全員による投票を選択した。そして、8月5日の深夜、静寂を破るかのように突撃ラッパが収容所に響き渡る——。77年の時が過ぎ、今なおカウラの日本人墓地には多くの偽名が墓碑銘に刻まれた元捕虜が眠る。

戦陣訓とは……… 1942年1月、東條英機陸軍大臣が戦地における兵士の行動規範として示達した訓令。序、本訓（其の一）、本訓（其の二）、本訓（其の三）、結から成る。もっとも知られることとなった本訓（其の二）の第八「名を惜しむ」は以下のとおりである。

恥を知る者は強し。常に郷党家門の面目を思ひ、愈々奮励してその期待に答ふべし、生きて虜囚の辱を受けず、死して罪過の汚名を残すこと勿れ

カウラは忘れない

監督：満田康弘 撮影：山田寛 音楽：須江麻友 製作：瀬戸内海放送
配給・宣伝：太秦 ©瀬戸内海放送 [2021/日本/DCP/カラー/96分]

Twitter: @cowra_wasurenai www.ksb.co.jp/cowra/



8月7日[土]より ポレポレ東中野、東京都写真美術館ホール他全国順次公開!

特別前売鑑賞券1,500円(税込)にて絶賛発売中! 当日一般1,800円(税込)の処

《先行上映》7月2日(金) 岡山:シネマ・クレール 086-231-0019
7月9日(金) 香川:ソレイユ・2 087-861-3302

